FHS LIBRARY News

令和２年１０月号②　船引高校図書館 feat.２年２組図書委員

今年も読書週間の季節がやってきました。読書週間は１０月２７日（火）～１１月９日（月）の２週間です。今年のキャッチコピーは「ラストページまで駆け抜けて」。なかなか最後まで読み切れない人は、これを気に読了のゴールテープを切ってみてください。

読書週間

終戦の２年後の１９４７年（昭和２２年）、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているとき、「読書の力によって、平和な文化国家を創ろう」と決意をひとつに、出版社、取次会社、書店と公共図書館が力を合わせ、さらに新聞・放送のマスコミ機関の協力のもとに、第１回「読書週間」が開催されました。

第１回の「読書週間」は１１月１７日から２３日。これは１１月１６日から１週間にわたって開かれるアメリカの「チルドレンズ・ブック・ウィーク」にならったものです。各地で講演会・図書に関する展示会が開かれ、その反響は大きなものでした。「一週間では惜しい」との声を受け、現在の１０月２７日から１１月９日（文化の日をはさんで２週間）となったのは、第２回からです。

それから７０年以上が過ぎ、「読書週間」は国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民」の国となりました。その一方、物質生活の豊かさに比べ精神生活の低迷が問題視されている昨今、論理的思考の基礎となる読書の重要性は、ますます高まってきています。本年の「読書週間」が、みなさん一人ひとりの読書への関心と、読書習慣の確立の契機となることを願ってやみません。

（「公益社団法人読書推進運動協議会」HPより）

いちばん心に残っている本

『島は僕らと』
辻村美月 著
講談社

ﾍﾟﾝﾈｰﾑ　しょうた

朱里（あかり）、衣花（きぬか）、源樹（げんき）、新（あらた）の４人の高校生が主要登場人物です。４人が暮らす島には高校がないので、高校生になると本土の高校に通います。高校卒業後は、本土の大学に進学したり島に残ったりと進路が分かれ離れ離れになるので、高校３年生がみんなで一緒に過ごせる最後になります。

ある時、霧崎ハイジと名乗る怪しい作家が島に移住したいとやってくるのですが、ハイジの本当の目的は移住ではなく、島に存在するという「伝説の作家の幻の脚本」でした。

初夏、朱里の祖母の同級生が亡くなり、村長が祖母に形見分けを持ってくるのですが、本土に渡ったまま行方不明になっている同級生・碧子にも渡してほしいと頼まれます。４人は修学旅行で東京に行く時が碧子を探すチャンスだと考え、演劇鑑賞の時間に抜けだすことにします。碧子を追うことで、「幻の脚本」の正体も明らかになります。

そして、４人が離れ離れになる時がやってきます――。

ぜひ読んでみてください。